
クロス×ライン

阪野隆平

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

クロス×ライン

【Nコード】

N1999E

【作者名】

阪野隆平

【あらすじ】

自由を求める『人』ではない『人』を中心に起こる破壊と混沌、そして運命の線が交錯する。少女と男。少年と少女。そして、兵器と怪物……。それぞれの線が重なるとき事件は動く。

序話 拘束解除（前書き）

初めての小説なので下手でも大目に見てください。

クロス×ライン

序話 拘束解除

目の前が暗くて見えなかった。目を閉じているのか、開いているのかも分からない。

目が本来の働きを放棄していたからだ。もっといえれば何も見えな
い、辛うじて強い光を感じるができるくらいだ。

この場所に押し込められて何年たったのか、知る術は全くなかつた。

毎日が同じ場所での同じことの繰り返し。

腹を割かれて内臓を持っていかれ、血を抜かれ続ける。それでも死ぬことはない。

だって、私は人間じゃないから。だから、ここにいる人間は何にも感じない。同族じゃないから。マウスだから。

マウス。

私はマウス。

内臓を持っていかれても血を抜かれてもすぐに元に戻る、とても便利なマウス。

それが事実。そして、現実。

事実だから泣けてくる。現実だから痛い。

涙なんてもう枯れているけど。痛みもずっと感じて慣れてしまっただけ。

私は夢を持ち続けていた。どんなときでも。
だから、我慢できた。けど、私はもう……………。

……………もうどうでもいい。死んでも構わない。楽になれるならそれ
でも……………

死に
たくない。やっぱり死にたくない！夢が、私の夢がまだ叶っていない。
だから。だから。だから。だから！

……………。

「……………まだ死んでいなかったか」

……………久しぶりに人の声を聞いた。何年ぶりだろう……………。

「恐ろしいほどの生命力だな」

勝手なことを……………。

「そろそろ、外の空気を吸わせてやってもよいかと」

外の空気？……………。ああ、新型爆弾の実験体とかだな。便利だから
な、そういうことに関して、『死なない』ということは。

「甘いな、大尉。この生き物は危険だよ。私達のような弱い人間に
とって。この『物』たちがどれほど危険なことか……………。」

弱い、か。人間誰もがそうだな。弱いから一人ではなく皆で仲良

く私の内臓を抉り続けるのだな。
弱くてよかったな。人間。

「しかし、このまま実験を続けてももう意味はない。こいつはもう実験体としては死んだ。それに実験もやりつくした。次は……実戦だな」

実戦？実戦だと？

約束を守らない人間の言うことはもう聞かない。

「そうだな。むしろ、実戦で復活するかも知れない。この……」

もう黙れ！

私が何をしたっていうんだ！私はお前らの言うとおりに任務を忠実に遂行しただけだ。言うとおりにすれば、私の約束を、夢を叶えてくれるといった。だから、お前らに従ったんだ。

その結果がこれだ。実験体だ。マウスだ。

もう絶対お前らの言うことなんか聞かない、聞くものか。

ガチャッ

口を塞いでいた拘束具を外される感覚がした。久しぶりに声を出せるようになった。声帯が生きていればだが。

「……コードネーム、聞こえるかい」

ああ、聞こえてるぞ。

「声帯が無事で助かったよ。気分はどうだい？」

最悪だ。

「仕事だよ。約八十年ぶり、第一次大戦争以来だね」

八十年も経っていたのか、ここに閉じ込められてから。

……どちらにしろ、引き受けないさ。

「もちろんこの仕事を完遂すれば君の夢。『自由』を今度こそ与えよう。どこにでも好きなところに行きたまえ」

自由。

それは私が何よりも求めていたもの。私の夢だ。

だが、人間は約束を守らない。信用できない。

「確かにそうだ。人間は皆嘘つきだ。だが、考えても見たまえ。代わりの実験体があれば、少なくとも君は我々の実験体にはならず済むのではないかね」

……それもそうだ。

約束は守るんだぞ。

私とその代わりの実験体とやらを捕まえてきてやる。

「話が分かって助かる。しかしまず……その血だらけの身体を洗いたまえ。髪も切ったほうがいいな。仕事の詳しい内容を話すのはその後からでも遅くはない……」

その言葉がいい終わらないうちに閉じ込めていた扉が開いて、暗

クロス×ライン

かった部屋に光が満ちた。

私は何十年かぶりに浴びた光は……閉じた瞼の上からでも涙が出
そうな位眩しかった。

序話 拘束解除（後書き）

これから、もっとうまく書けていけるよう努力していきます。

クロス×ライン

一話 昼食と会話（前書き）

人物の名前を変更しました。

クロス×ライン

一話 昼食と会話

西暦二千二十五年、一月三十日 昼前

大日本帝国軍帝都第六ブロック基地 食堂

この日の大日本帝国の首都、帝都は池が凍ってしまうくらいの寒さに襲われていた。

雪もこれでもかというくらいに降っているテレビの映像がさらに外の寒さを感じさせ、現在、自分がいる場所は天国の様だと木野柎木のひこは思った。

軍の食堂天井近くに設置されているテレビの映像を、柎はうどんを啜りながら見ていた。

大日本帝国帝都第六ブロック基地内にある、収容最大人数二百人の食堂の中には柎を除いて数人しかいなかった。

もつといえば、食事を取っているのも柎一人だけで他の人間は、新聞を読みながら湯気が出るコーヒーを飲んでいる退職間近の老兵、一人で詰め将棋をやっている太った准尉ぐらいだった。

しかし、一時間もすればここも満席になる。現在、外の吹雪の中で訓練中の連中が戻ってくると席を取るのに苦労する。それなら早めの昼食を食べるほうが席を取るのに楽なのでいいに決まっている。柎はそう考えていつも早めに昼食をとっているのだ。

それにもうひとつ。自分が所属している隊はお世辞にも忙しいとはいえない、軍の中でも特に暇な隊だったからだ。

さらにいうなら、弁当を作ってくれるような存在は柎にはいなかった。唯一の肉親である妹は兄の弁当を作るよりも睡眠時間と勉強の時間を優先するだろう。

そのとき柎の背中が不意に揺れた。誰かに叩かれたことが原因だ。

後ろを振り向くと士官学校で同期だった、柿本誠太郎かきもと せいтарろうがトレイの上に昼食を載せた状態で柵の座っている椅子の後ろに立っていた。

「よう、木野。相変わらず冴えねえ顔してるな」

やや乱暴な口調は彼の特徴だ。外見も黒い軍服を着てなければあまりお近づきにはなりたくない荒々しい熊のような顔つきをしている。軍服を着ているからといって一般人が親しくしてくれる訳でもないが。

一方の柵は背は高い柿本より高いが彼ほどの筋肉はない。熊のような顔つきと違って、知的で端正な顔つきだ。眼鏡を掛ければ、ガリ勉といわれても文句の言えない顔つきである。

ここ最近柿本の隊は忙しく、会う機会がなかなかなかった。

この時、二人は約一ヶ月ぶりに言葉を交わしていた。

「訓練、早く終わったのか」

柿本が隣の席に座る様子を見ながら柵は聞いた。

「そうだよ。外は大雪だからな。隊長がこれ以上続けても風邪の犠牲者を増やすだけだって愚痴ってたな」

「なるほど。杉村隊長は優しいんだな。どんなときでも怪物に立ち向かわなくちゃいけない身分である『有害指定生物捕獲捕殺専門部隊』の隊長なのに」

「こんなときに暴れる元気のある『生物』もいねえよ。そう祈りたいね、俺は」

「そうだな」

有害指定生物。

約二百年前の西暦一千八百十年、十月にイギリスの森の奥で発見されたのを皮切りに十年も経たない内に世界各地に存在することが確認された。

その姿は多種多様だが共通点は捕食対象を人間を含めた全ての生き物に定めていた、ということだ。恐ろしいことに有害指定生物同士

も含めてである。

皮肉にも『生物：』の出現で世界中の人間達は力を合わせるため、自分達の争いを中断して『生物』との戦いを始めることになった。二度の大戦後、世界中の人間は『世界連合』を結成し、『生物』たちの動きは西暦二千年以後、影を潜めている。

しかし、一方で沈静化した『生物』の密輸などが問題となっている。

生物は強靱な生命力と再生能力を持っており、各国でも研究が進められているがそれは先進国、しかも世界連合の常任理事国のみである。それ以外の国は三ヶ国以上の常任理事国の承認を得なければ『生物』の研究は行えない。

しかも、承認を得るには一年以上の月日がかかる。多くの発展途上国は一步でも先進国に追いつきたいため『密輸』という危険な橋を渡らざるをえないのだ。

また、密輸の過程で逃げ出した場合の被害は想像以上のものとなる。それを証明した痛ましい事件もあったがここでは深く追求しない。

「奴らってそんなに凄いのか」

柊が好奇心で聞いた。生きている様子は士官学校時代にビデオで捕獲捕殺について講習を受けたときの映像の中と、実物は死体で見ることがなかったからだ。生きている実物は見たことがなかったのだ。

「ああ、ホントな」

暗い声で柿本が言った。

二ヶ月前、彼に会ったとき五回程任務で捕獲と捕殺に携わったことがあると聞いたからだ。そのときは、酒を飲んでいたので彼からまともな回答を得られなかったが。

「もし、あいつらがまともな知識をもっていたら、って思うと冷や汗かくぜ。大体火を吐く奴なんかに対して飛び道具なんか絶対に役に立たねえ。逆にこちらが火傷する」

柿本はそういつて身を震わせた。

『生物』が危険といわれる理由は人を捕食する以外にこの特殊な能力がある。

炎を出す以外に柊が知っているのは水の塊を吐き出して、コンクリートを破壊したとか、超音波で建物や人の鼓膜を破壊したとかだ。どちらも、都市の中心に現れればとんでもない被害が発生する。『生物』のもつ特殊能力はある意味、人が生み出した武器以上の危険があるのだ。そのため、都市内には絶えず軍の姿が見られる。

しかし、欧米やアメリカのオカルト集団の中にはそんな『生物』を神の使いとして崇める人間や逆に地獄の使者として過激な行動に出る集団などがある。

最近では少し変わっている人間や動物を見つけると集団で暴行を振るい、取り返しのつかない結果に多くなってきた。

また、多くの動物愛護団体から『生物』の扱いに対しての抗議文がかなり送られてきてもいた。『生物』のほとんどが軍に捕殺されているというニュースが放送されたため、抗議の連絡は未だに絶えることが無い（もつとも、以前から捕殺禁止の要求はあった。理由は後述）。軍人に言わせてみれば『生物』に動物愛護を説く団体の気が知れない。彼らも一度、捕獲することの難しさを知ればそんな酔狂なことを言わなくなるだろう。

「お前が羨ましいよ。現場よりそっち（戦術専門）のほうが怪我の確立は少なくとも」

湯気が出るうどんを柊と同じように啜る柿本は言った。柊は軍でもエリートである戦術専門軍人だった。逆に柿本のような軍人を戦場軍人と言っ。

この呼称は最初、戦術専門の軍人たちが戦場にいる軍人をバカにした言葉から生まれた。このことを聞いた戦場にいた軍人達は大規模な反抗運動を起こしたが、当時、戦場にいた司令官が「戦場に

る俺たちのほうが軍人としての格は上だ」という一言から反抗運動は沈静化しそのときの呼び方が現在に定着した、という逸話がある。「柿本みたいな奴がいなきゃ、俺らみたいな非弱な軍人は一瞬で殺されるがな」

この言葉は嘘ではない。実際そうだからだ。自分のようなデスクワーク派の軍人は、柿本のような戦場軍人がいなければ『生物』とまともに戦って生き残ることはまず不可能だ。

冷め始めたうどんの麺を口に運びながら柊は話題を変えるため、最近の様子を聞いた。

すると、柿本は黙り込んだ。彼と長い付き合いの柊は直感した。

(何かいいことがあったな)

「新しい彼女でもできたか」

冗談交じりに聞いた。が、答えは柊が久しぶりに驚く内容だった。

「ついこの間、昇進したんだ」

柿本の声は何気ないように言おうとしながら、何気なく言いきれなかった。

「なんだって？」

柊は驚いて箸を落としかけた。

「いつ昇進したんだ？」

柿本の顔を見ると照れくさそう笑っていた。

「ついこの間、密輸送途中の有害生物を捕縛するときに隊長のアシストを上手く出来てな。そのときに隊長から『お前は見込みがあるから』といってな」

照れくさそうにいいながら「まあ、ほんの准尉なんだが」と唇を緩めながら言った。

柊は驚いて声も出なかった。

柊の現在の階級は少尉。柿本の准尉より一つ上である。しかし、柊の場合は戦術専門の少尉だ。戦術専門の軍人の中では一番、地位が低い。

それでも、士官学校卒業時に少尉というのは最高位だった。つま

り、柊は士官学校時代、戦術科でトップクラスの成績の持ち主だったのだ。

日本帝国の士官学校では戦術学を選んだ兵は普通の兵より卒業のとき高い地位が与えられる。これは戦術専門の兵は名門出身のものが多いため（一概にそうと言えない。現場の軍人でも名門出身の人間は多くいる）で、柊の亡くなった祖父も戦術方面の准将だった。また、戦術学のほうが、学費が高いことも名門出身のものしか学ぶことのできない理由のひとつでもあった。

昔から使う人間のほうが使われる人間より高い地位にいることは当たり前前だ。だが、柿本の場合、下士官では一番下の伍長から始まり、わずか一年で准尉にまでなったのだ。そのこと自体は現場での働きによつては珍しいことでもない。働きも含め隊長に気に入られれば、士官学校卒業（二十五歳）から五年程で佐官クラスも夢ではない。

しかし、一年間まったく同じ地位であるということに最近、柊は少なからず不満を感じていた。

柿本のほうが一人の戦場の兵としては優秀であるということは士官学校から知っていた。分野は違うがそれでも一年間、全く成長していない自分の力が恨めしく思える。

「凄いな、柿本。俺なんてまだ少尉だ。一年経つても」

柊の声は元気を失っていた。思っていた以上に心のダメージは深いらしい。

「俺とお前は分野が違うじゃねえか。お前は使う、俺は使われる。俺たちはそういう関係だって、卒業するときいったじゃないか」

そんな様子に柿本も励ますようにいったが最後にこう付け加えた。

「まあ、あの人の下にいるままだと昇進は難しいかもしれんが」

あの人……。柊の上司の零番隊隊長、森山命人もりやまのみことのことだ。

柊と命人との出会いはある意味運命的なものだった。

クロス×ライン

そついつと響きはいいが終に言わせれば、あの時から俺の不運の始まりだといっただろう。

クロス×ライン

一話 厚食と会話（後書き）

評価してくれると嬉しいです。

一話 回想（前書き）

ちょっと長いかも知れかもしれませんが読んでくれると嬉しいです。

クロス×ライン

二話 回想

すこし暖かくなり始め、春の兆しが見え始めた頃。

大日本帝国軍帝都第六ブロック基地のどの隊に配属されるかが一週間後に発表される日であった。

発表までは休暇であるため（名目上、この一週間は配属されるまでの準備やゆつくりと家族と過ごすための休暇である）、それまでの厳しい訓練、勉強の日々から抜け出せての開放感が柊たち新兵達にあった。

柊も彼女と今まで訓練と勉強漬けのせいで、一緒に過ごせなかった分を取り戻そうとプレゼントの準備、レストランの予約など至今までの貯金を少し崩したのだが……。

休日の一日目、十三日。

この日、柊は彼女といつも食事をしているレストランより、若干上のランクのレストランを予約した。

正直、安くはなかった。だが、これがせめて今まで出来なかったデートの分、全部とはムシが良すぎるかもしれないがそれぐらいの気持ちでお金を払った。

彼女との連絡を朝の九時にとり、七時にレストランで会う約束をした。この時点までは全くいつもと変わらなかった。もっとも、それは柊の私見だったが。

七時になると彼女はレストランに現れ、予定通り食事もメインディッシュを食べ終え、デザートに移ろうとしたとき彼女はこんなことを言つて柊の心をズタボロにした。

「ごめん、柊君。私達別れよ」

「え、なんで？」

別れられる理由がわからない。

「いい人ってことは分かっているの。けど、もう付き合っていく自

信がないの、ごめん……」

意味が分からない。
何故だ。

なかなか、会えなかったことが理由なのはなんとなく察しがついた。しかし、これから正規の軍人になれば少なくとも士官学校の頃ほど時間がなくなる訳でもない。

そしてここで最悪の……ある意味、この状況で最も真実に近いであろう言葉をゆっくりと言葉に出した。

「……新しい彼氏、か」

彼女の答えは無言。

それを肯定と受け止め、さらに信じられないことに、

「お腹の中にね、赤ちゃんが……」

……もう、たくさんだ。言葉これ以上出すと、目から熱い水が出そうだったので必死に我慢した。

それからのは話は「元」彼女の一方的な攻撃だった。

新しい彼氏が自分が一人だったとき優しくしてくれたり。

新しい彼氏が終より経済的に豊かなことだったり。新しい

彼氏が……。

気がついたときには自分の部屋のベットの上だった。家まで戻ってきた記憶がスッポリとない。

(もしや、夢オチ?)

一種の現実逃避だったがそう思わなければやっていられない精神状態だった。そして、残酷なことに夢オチではない証拠にすっかり財布が軽くなっていた。て、いか別れるつもりなら食事にOKするなよ！俺は遊びだったのね！……少し涙が出てきた。

休日の二日目、十四日。

傷心の心の状態を保ったままベッドの上にいたら、いつの間にか夕

方だった。一日無駄に損した気分だった。

休日の三日目、十五日。

ダメージから一応回復した柊は今までロクに感謝の念を表していなかった妹に、感謝を示そうとプレゼントを贈ることにした。もつとも、そのプレゼントは元カノに渡そうと思っていたネックレスだったが。

少し、高すぎる感もあったが、せっかくだ、処分するのも忍びない。せっかく買ったのだからここで使わなければ、否、ここで贈らねばいつ贈る！の、心意気で帰ってくるのを待っていたが帰ってこなかった。テーブルの上にメモがあった。

『しばらく、友達の家に泊まります』

日付は昨日、現在の時間は二十三時。この日、寝た場所はソファ一だった。

休日の四日目、十六日。

この日こそは無駄な日にはしないと決め、配属されてからの準備（本来そのための休日だ）に午前中は費やし、午後からは家の中の整理整頓に勤めた。大量のゴミ袋を見ながら予定通りに充実した日だと心から思えた。

しかし、空しい気分になるのは何故だろう……。

休日の五日目、十七日。

この日は士官学校の仲間達と飲むことに決めていた。仲間の一人曰く「前々夜祭」とのことだ。

この数日、気分が沈むようなことしかなかった柊にとってこの飲み会があったことは幸いだった。唯一いけなかったことは酒に強くないくせに飲みすぎたということだ。

普段は無計画に飲まない柊だったが、この日は飲んでも飲み足りないような気分だった。

夜中前、二次会に参加したあと三次会に行く仲間達と別れた。

仲間の何人かは心配して一緒に帰ろうとしたが柘は断った。なんとなく吐くかもしれないと思ったからだ。仲間といっても吐くところはあまり見られたくない。

幸いなことに吐きはしなかったが尿意は覚えた。しかたなく近くの噴水で有名な公園のトイレに入り用を足して外に出ると、先ほどトイレに入るときには全く気づかなかったが少女が噴水の前のベンチに座っている。

今は夜中前だ、なんで女の子が……。

そう思った柘だったが少女が持っている缶のラベルを見て、そんな考えは吹っ飛んだ。

柘がつい先ほど飲んでいたビールと同じラベルだった。

昔から、柘は飲酒とタバコは絶対にしないと決めていた。飲酒は仲間達との付き合いもあつて守れなかったが、タバコは今でもしない。むしろタバコの臭いを不快と感じているほどだ。

そんな彼にとって飲酒をしている少女をそのままにしておくことは許せないことだった。

酒を飲んでいて気分が大きくなっていたこともそんな行動に移したのかもしれない。

「おい、その君！子供がビールなんか飲むな。大人になってから飲め」

呂律はしっかりしており、ちゃんと意味は通じたはずだ。しかし、少女は聞こえなかったかのように柘が見ている前でビールをもう一口飲んだ。

「おい！大人をムシするとひどい目に遭うぞ、コラ！」

巡回中の憲兵（警官の役割の兵士のこと）に聞かれると職務質問されかねない状況だ。

夜中、少女に因縁をつける男の大人。

それでも、少女はこちらを向かない。

少女の見た目は中学生、もしかしたら小学生かもしれない。それ

ぐらい小柄で肩辺りの長さの毛は所々、最近の流行なのか少し脱色している。顔は柊のしている方向からは見えなかった。

少女は完全に無視を決め込んでいるらしく、ビールを再び飲んだ。柊はそんな少女の態度に女も子供もあるかと思ひ、少女の座っているベンチまで歩き、小さな肩に手をかけてこちらに顔を振り向かせた。

きつと驚いた顔をしているだろう、最近の大人を舐めるなよ。柊はそう思った。

驚いたのは柊のほうだった。目は大きく少女の瞳孔はサファイアのような青色だった。

顔立ちは日本人特有の容貌で、瞳孔の色が黒だったら問題なく『大和撫子』という言葉がぴったりの少女だった。

「君は？」

やや上から目線の口調と少女特有の高い声だった。そして、怒っているように感じられた。

女性を怒らすと面倒なことは妹で実体験済みだ。しかし、その声に若干動揺した柊だったがそっちが悪いのだから、動揺する理由はないはずだ。

「俺の名前は木野柊。これでも士官学校の戦術科卒のエリートだ」
普段の彼ならこんなことは言わないだろう。

「と、いうと二日後、第六ブロックのどこかの隊に配属になるんだね」

なぜこの少女がそんなことを知っているのだろうと、素面の柊なら考えただろうが、残念ながらこのとき、呂律はしっかりしていたがかなり酔っていたので少しも疑問に思わなかった。

「ああ、そうだ。俺はエリートだから、絶対に一年目で大尉にまで昇進して見せるぜ」

普段なら絶対に言わないような口調でこれからの希望にあふれた人生設計を見ず知らずの少女に発表する。

「……わかった。それじゃ、二日後の発表を楽しみにしておきたま

え」

「んあ？」

その言葉がいい終わらないうちに激しい風が起こり……。……。……。柊が気づいたときには人影ひとつ、空き缶ひとつ見当たらなかった。

「山野柊君か。久しぶりに面白い人間だね」

少女は辺りをキョロキョロと見回した拳句、目を回して倒れた柊の様子を見て笑いながら呟いた。その場所は高層ビルの屋上だった。再び強い風が吹き……。少女の姿はそこからも消えた。

もし、このまま何もなければこの出来事は柊の記憶の中で風化しながら、若い頃に体験した不思議な出来事として残っていただろう。もちろん、こんな回想をしているのだからこのままで終わるはずがなかった。

一話 回想（後書き）

評価をしていただけると嬉しいです。

クロス×ライン

クロス×ライン

三話 回想そして現在（前書き）

今までの話を一つにまとめました。

三話 回想そして現在

配属隊発表の日である。

柘はあの夜の出来事を不思議だと感じながらも、「酒の飲みすぎ」という考えで決着をつけていた。

それよりもこの日は配属隊の発表の日なのだ。そんなことをいつまでも引きずっている場合ではない。

柘は発表の九時より三十分早く配属先が発表される部屋に着いていた。何人かは柘よりも早く着いていた。

どの面々も柘と同じクラスの面子だがあまり話したことはなかった。

共通点はどれも真面目の上にクソがつくという事ぐらいだ。柘自身、自分のことは真面目な方だと思っているが彼らほどではないだろう。若い青年が合コンに誘われて、「勉強があるから」と断る人間がクソ真面目といわずになんと言おう。

柘はただ遅れるよりは早く着いていたほうが気持ち的に楽だと思いい早めに来たのだが、どうやらこれは逆効果だった。沈黙の部屋で発表までの三十分間を過ごすのだ。緊張しないほうがどうかしている。

十分ほどして、徐々に顔見知りのメンバーが部屋に入ってきた時にはほっとした。これで孤独な空間から開放される。緊張感は相変わらず残っていたが先ほどよりはマシだった。

しばしの雑談のあと（内容は配属される隊のこととはかけ離れたものばかりだった）九時を知らせる鐘が鳴った。

九時の鐘がなり終わる前に入室してきたのは五人の日本帝国軍の軍服を来た人物で、五人とも大尉の地位を示す階級が光っていた。それぞれの隊の副隊長だ。

クロス×ライン

帝都第六ブロックに限らず日本帝国の軍隊は大抵が五隊に分かれ

ている。

一番隊は最も人数が多い隊で主に国防、基地の防衛。

二番隊は『生物』の捕獲、捕殺の専門。

三番隊は国防、『生物』両方の現場の作戦立案、および指揮。

四番隊は『生物』の研究、武器の開発。

五番隊は担当する地区の憲兵（警察の役割）としての役割を担っている。

「これより、第158期大日本帝国軍帝都軍第六ブロック配属兵発表を行う。呼ばれたものは前にでて紙を受け取れ。この紙は正式にその隊に所属することを証明するものだ。紙の裏に所属することになる隊の本部への地図が書かれている。そこにいき隊員が全員揃うまで待機」

よく通る声で一番隊の背の高い副隊長がいった。

しかし、言い終えたあと隣の開いた空間に視線を走らせたあと諦めが入ったような顔をしたのは気のせいか。

発表が始まった。

発表の仕方はそれぞれの隊の副隊長が自分の隊に配属することになる隊員の名前を、あいつえお順に発表していく。呼ばれた兵は前に出て副隊長に紙を渡され目的地に向かうために部屋を出て行く。

「相沢敦、五番隊」

「赤松修平、二番隊」

「天城守、四番隊」

柘はいつ自分が呼ばれるのかと緊張しながらも興奮していた。

柘は三番隊を希望している。三番隊は作戦立案と現場の指揮で、柘が士官学校で学んだ戦術学にぴったりの隊である。さらに、柘は

戦術学の成績はトップクラスであった。希望が通ることはあっても、通らないということはあるえなかった。そう思っていた。

「柿本清太郎、二番隊」

友人の柿本が呼ばれた。柿本は柘より前の席にいて小さくガツポーズしたのが目に入った。彼は二番隊希望だったのだ。

「垣根和成、三番隊」

三番隊に垣根が呼ばれた。あまり好きな奴ではなかったが、これから一緒の隊になるんだ、仲良くしないと、と柘は思った。

いつまで経っても呼ばれないと思ったがまだ『か行』だ。まだまだ先だ。そう思っている内に気づけばもう『まみむめも』の段だった。

「目高務、五番隊」 次だ。

「向井宗平、一番隊」 この次に決まっている。

「山」なんで！」

自分の名前の『も』の段をすつ飛ばしている。何かの間違いだろうが、まったく、昨日からついてない……。

心の中でそう毒づいた。

柘の声は副隊長たちの発表を遮るには十分だったため、まだ発表されていない同期たちが不満そうに小さな声で悪態をついていた。彼らも気が立っているのだ。

「君は？」

四番隊の眼鏡を掛けた副隊長が聞いた。

「自分は木野柘、階級は少尉です」

士官学校では戦術学では一、二を争う成績だったと柊は自負している。それは今でも変わっていない。発表を忘れられること自体おかしなのだ。きっと何かの手違いだ。柊はそう思っていた。すると、

「ああ、君はそのまま座ってなさい」

一番隊の副隊長が穏やかな声でいった。

「君はあとで発表するから」

その言葉を聞いたまだ呼ばれていない同期たちの間で声飛び交った。

「静かに！」

二番隊の鬼のような顔をした副隊長の大声でようやく静かになった。それから、三分後。部屋には五人の副隊長と柊以外は誰もいなくなった。しばらく、気まずい空気が流れる。

「あの！」

柊は堪えきれずにきいた。

「自分は……」

「発表者が来ていない。まあ、予測はしていたが」

諦めの気持ち混じった声で一番隊副隊長は言葉を濁した。そして、懐から一枚の紙を取り出し、その紙を柊に渡す。

「その紙の裏の地図をみて、赤い丸の部屋まで行きなさい」

そういうと、柊が質問する間もなく副隊長全員風のような速さで部屋を出て行ってしまった。

広い部屋には柊一人だけ残っていた。

何がなんだかまだ、納得も出来ていなかったし、疑問にも思っていた。

俺が何をやったんだよ……。

一週間前から日に一度は柊の心の中で言っていた言葉だ。

そのまま立っているわけにもいかず、紙に書かれている文字に目を通した。

そこにはこう書いてあった。

『木野 柊 殿』

貴殿を零番隊に配属することを命ずる。

隊長 森山 命人』

もう何がなんだか分からなかった。いきなり聞いたこともない隊にとばされる……。

最初は一体何の冗談かと思った。そして、次にはこの状況は冗談などでは決してないという、認めたくないという現実が存在した。

俺が何をしたって言うんだ。

……本当に、最近の俺は運がない、いや呪われているとしか思えない。

この一週間にあった主な出来事は、彼女に振られる、妹にプレゼントは渡せない、見知らぬ少女に逃げられる……。

……もう何もかもがどうでもよくなってきた。

かといって、このままずっとこうしている訳にもいかない。鉛のように重い現実を飲み込み、裏に書かれている地図を頼りにしながらその『零番隊』の部屋へ向かうことにした。

零番隊の部屋への道程は険しかった。身体的にも精神的にも。

一、地下三階である。エレベータは地下一階までしか繋がっておらず、そこから自分の足で三階まで降りた。途中、空のダンボールが山積みになっていた。

二、ドアまでの道に階段以上の量のダンボール（中身あり）だらけでドアまでの進路をほぼ塞いでいた。このダンボールをどけるのに十分な時間を無駄にした。

三、ドアについている零番隊という看板がダンボール製で文字が

油性のボールペンで書かれていた。さらに、紙の看板がついている角度が斜めになっている。

はあ……。

ここまで来るまでに十回以上のため息をついていた。

いつから、エリートコースを踏み外したのだろうか。素行はよかった。成績もトップクラスだ。人間関係も（異性以外なら）良かったはずなのに。

悩んでいても仕方ないのでドアノブに手を触れた。そのとき、バチツという音と共に手に痛みが走った。反射的に手を引っ込める。暖かくなってきたこの時期に静電気？

偶然だろうが本当に呪われているとしか思えなかった。

大体、なんで始まる前からこんなに疲れなきゃならんのだ。

「はあ」

さらにため息のカウウントが増えた。

改めてドアノブに触れる。今度は何事もなくノブを捻りドアを押した。

「失礼します」

緊張感のため息と共にどこかへ行ってしまったらしい。もしくは先ほどの静電気に驚いて逃げ出したか。自覚があるほどに気が抜けた声だった。

部屋に入っただけの第一印象が「普通」だった。窓はなく（当たり前だ。地下なのだから）、ロッカー十台が、規則正しく右側の壁を背にして並んでいた。十台目のロッカーの奥には着替えのための部屋か、ドアが見えた。左側には衝立の向こうに本棚と来客用のソファーが一对、その間にテーブルが置いてあった。最近使われた様子は見られない。目の前には縦に置かれた事務机が左右に四つずつ、合計八つあった。上には埃以外何もない。

そして、一番奥の横に置かれた事務机の奥にある椅子が終に背を向けていた。黒い軍服を着た椅子の主とともに。

先程、どこかに行ってしまった緊張感がいつの間にか戻って

きていた。柘自身、直に隊長に会うのは初めてだったからだ。

たとえ望んでいた隊でなかったとしても、努力次第で希望の隊に再配属されるかもしれない。そんな淡い期待を持って、第一印象である挨拶だけはしっかりしようと柘は思った。先程の気の抜けた挨拶はカウントしないことにする。

直立不動の姿勢で軍隊式の自己紹介をする。

「木野柘少尉、本日付で零番隊隊長、森山命人の命により零番隊に配属されました。今後よろしくお願ひします」

森山隊長はそんな声に何の反応も示さず声も上げず、身体も電池が切れたラジコンのように動かなかつた。

柘は少し不安になってきた。

入室してきたときの挨拶はもつとしつかりしておくべきだったとかもしれないと、柘は後悔し始めた。

何にせよ、自分で撒いた種かもしれないから、謝らなければと思ひ声を出した。

「あの、森山隊ちょ「お酒は飲んでもいいかな」」

初めて聞いた隊長の声は高かつた。自分よりも年下のような高い声だ。だが、疑問に思ったのはその言葉の内容のほうだった。

え、何を言っているのだろう。子供でもないのに何をわざわざ……、ん。今の声はどこかで聞いたような……。

柘の脳が過去の記憶の棚をひっくり返そうとするのと同時に椅子は半回転した。その椅子の主、森山命人の顔を見て柘は呪われているのではなく、神の悪戯ではないかと思つた。

その顔は純日本人の顔立ちで、髪は少し脱色して白髪交じりの黒髪。もつとも特徴的な瞳孔の色はサファイアのような青色。

「な、なんでここに……？」

二日前、公園でビールを飲んで自分が因縁をつけた少女がそこにいた。

少女　森山命人は悪戯が成功した悪ガキのような顔で同じ言葉を繰り返した。

「もう一度いうよ、お酒は飲んでいいかな」

柘は何も言えなかった。という言葉が出てこなかった。

「思ったより普通の反応だね。私の考えじゃ、記憶がないかもしれないとも思いもしたんだけれどね。あの時相当お酒飲んでいたみたいだし。けれど、もう一度会えて嬉しいよ。エリート軍人さん」

柘の頭の中はパンク状態だった。もはや、現実と夢との境が曖昧になってきてはじめている。

頭の中はしばらく整理の時間を求めていた。

「おや、驚きすぎて頭がショートしてしまったようだね。まあ、これも予測していた事だよ。大丈夫、落ち着くまで待っていてあげるから」

二分後。

ようやく頭の中で整理が出来、落ち着いた。その様子を見て、命人は安心したようにいった。

「落ち着いたようだね。まあ、そこに座りなよ」

彼女からみて、右側の事務機の席を指した。柘からは左側だ。柘は急ぎ足で歩いていき埃を払って椅子に座った。

「さて、きつと、君は色々質問したいだろう。今日の零番隊の活動内容は質問デーとしよう。なんでも質問したまえ。答えることの出来る質問ならいくらでも答えよう」

芝居くさった声で命人は言った。

柘には質問したいことが山ほどあったが最初の質問はまずこれだった。

「あなたは大人なんですか」

柘にとってはもつとも、気になることだった。子供が軍にいるわけ無いと分かっているも聞かずにはいられない。

それを聞くと拗ねた子供の顔をして（実際、子供にしか見えなかった）「君もか」と、小さな声で言いながら「そう」と肯定した。となると次の質問は当然これだった。

「それじゃ歳は」

「君は初対面の女性に対して年齢を聞くのかい」

「……すみません」

「いいよ、別」

拗ねたままの表情で座っている椅子でくるくると回転し始めた。その様子が可愛らしく柊ははつい笑ってしまったが、笑ってしまったあとで後悔した。また、不機嫌になるのではないかと。だが、その心配は杞憂だった。回転をやめた命の顔も笑っていて「気にすることははないよ」といった。この行動は彼女なりの気遣いだったらしい。

「今まで会ってきた人間の九割が最初に君と同じ質問をした。むしろ違う質問をされたほうが困ったね」と軽い調子でいったあとに「でも、この質問はやっぱ慣れないよ」と付け加えた。

「さて、他の質問は何かな？私の年齢以外なら出来るだけ答えるつもりだけど」

「それじゃ、この隊は一体何をするんですか。あと、他の隊員は」
柊は思った。隊と机が飾りの場合は即刻転属願いを出すつもりだ。「最初の質問はこの隊の役目は『最後の切り札』なんだよ。准将以上の権限がある人以外、ボクらを動かすことは無理だね。あと政府の大臣かな。細かいことは鳳翔君ほうしょうきんに聞けば分かるよ」

今日、二度目の驚きで声が出なかった。

准将は軍隊で言えば最初に將軍と呼ばれる地位にある人物だ。政府の大臣は説明不要であるが……。その二つ地位どちらかにある人物じゃないとこの隊を動かせないということなのか。

冗談にしては笑えない。本当だとすればまさしく『最後の切り札』であるが、一体どんなときに出動するのか。

あと鳳翔って誰だ？

「ああ、鳳翔君はこの隊員で口は悪いけど頭いいんだよ。法律とかルールとかにすごく詳しいんだ。観光地巡りが大好きで最後に連絡くれた場所はアンコールワットだったかな」

柊の心を読んだかのように一方の質問に命人は答えてくれたが、

もう一方に閉じてはまだ答ええてくれない。

柘は我慢できずにすかさず聞いた。

「出勤するのはどんなときなんですか」

「この隊じゃないと解決できない事件のとき」

当たり前だ。

「それはどんなときなんですか」

「君はまだ、知る必要はないね」

「……はい」

何か言い返そうと思ったが自分はこの隊では新人だ。隊長以外は見当たらないが。彼女もまだ気を許してはいないのだろう。

しばらくして、命人は柘が質問するだろう質問の答えを答えた。

「あと、ここに隊員がいないのはね、みんな軍が嫌いだからだよ」
その答えはさらに疑問を生む。

「軍人じゃないのですか、この隊員は」

柘は言った。今までに無い強い口調で。一軍人として軍が嫌いだからという理由で基地に常駐しないとは一体どういうことだ。

その質問にいままで滑らかだった命人の言葉の歯切れが悪くなった。

「一応、名目上はそうなんだけど……。皆、それぞれ事情があるんだよ。ほとんどの隊員は有給とって旅しているよ。定期的に連絡くれるし」

柘はもつとこのことについて質問したかったが、命人の顔を見るとこれ以上聞くことは出来なかった。命人の顔は寂しそうだった。

彼女の目線の先には八つの事務机に向いている。今はいない隊員たちに思いを馳せているのだろうか。

人の心に疎い柘でもこれ以上突っ込んで質問するのはよくないと思つたので質問の内容を変えた。

「自分の席はどこでしょうか？」

「今座っている席でいいよ。六甲ろくごうの席なんだよ、そこ」

そういつて、柘は予想以上に命人が小柄なことに気づいた。だが、

小柄といつてもやはり体形は女性で出ているところは出て、引っ込むところは引っ込んで入っているようにみえた。

「柊君」

「は、はい」

「なにを慌てているの……。まあいいや。この隊にはひとつとても大切な決まりがあるんだ。これは君にも守ってもらいたい」

深刻そうな声で命人が言った。一体どんな決まりなのだろう。

「それはね……」

「はい」

ゴクツ

柊は自分が生唾を飲み込む音が聞こえた。

「私に勝てば月末の飲み代は隊員の自腹、隊員の誰かが私に勝てば飲み代を奢るといふ決まりなんだよ」

とても嬉しそうな顔と声で大々的に発表される決まり。

だが、柊は思った。

なんだ、それ。

「いま、『なんだ、それ』と思ったでしょう。甘いな、君は。これだから、最近の若者は真面目すぎて困る」

年寄り臭い台詞を言いながら、オーバーに天を仰ぐ命人。

なんとなく、何回も命人はこのリアクションをしたような気が柊には感じられた。

「どうやって勝ち負けを決めるんですか」

どうせトラランプかオセロとかだろう。

「これだよ」

そういつて取り出したのは小さな深鼠色のカセット。柊が生まれた頃からある携帯ゲーム機の最新作カセットだった。ジャンルはRPG。

「……それで勝負するんですか」

呆れて声も出せなくなってきた。

「そうだよ。職場に来てやってもいいし、家に帰ってやってもよし。

個人的には両方をお勧めするけどね」

「……………」

声も出なかつた。あまりにもくだらなすぎて。軍隊に入ってゲームを強要されるとは思わなかつたのだ。

しかし、所詮ゲームだ。大した事はない。勉強や訓練に比べれば遥かに楽に決まっている。

柊はそう考えた。

だが、命人の、

「ボクは初心者でも全力で立ち向かうよ」

という言葉がやけに引つかかった。所詮ゲームと考えていた柊にとって、その言葉は不吉の予感に感じた。

「奢りだからね。負けたら本当に」

ポカンとした顔の柊の顔を見ながら命人は笑う。

「あとね、ボク達に出勤要請は来ないほうがいいんだよ」

「そんな！それじゃこの隊の意味は」

信じられないような、実際信じていない口ぶりで柊は叫ぶようにいった。

「いったでしょ、『最後の切り札』。『切り札』を何回も使っちゃいけないんだよ、少しは努力しなくちゃ」

そういつて命人は一度言葉を切る。

再び口を開いたとき、柊の傷ついた顔が目に入った。

「結局のところ、ボクたちが動かないってことは世の中、平和ってことね」

西暦二千二十五年一月三十日、午後五時

帝都第六基地ブロック内の零番隊隊室

大日本帝国帝都第六ブロック基地の地下深くの部屋の中、リズム

カルな音が鳴り響いている。現在、二人の人影が自分の持っている画面を睨み続けている。

「なかなかやるね」

軽い調子の声で少女の声が部屋に響く。

その声に埋もれながら小さく悪態をつく声が聞こえる。

「けど、最後が甘いね」

アニメなどでよく聞く、「バッキューン」と何かが倒れる音が聞こえた。

柊は柿本と別れてからまっすぐ零番隊の部屋に戻った。月最後の前日という日はどちらが明日、飲み代を奢るかという重要な対決の日があったからだ。

柊は去年の4月から、現在までの戦績は0対9。つまり全敗で彼の経済状況は毎月赤字寸前である。

そして、今月の戦いの結末は

「今月も勝ったよ」

二人しかない部屋に少女 命人の声が反響する。これで柊

は10連敗であった。あの日感じた不吉の予感は大当たりだった。

命人の表情は実に嬉しそうだった。

もう一人の顔は、

「……」

無表情。

「今月もボクが奢られるのか。今月はお鍋が食べたいね。寒いしちようどいいよね」

「……分かりました」

柊の声は全てを諦めたような男の声だった。

結局、今月も彼に経済的余裕は全くなかった。いつもならここで無言のまま終わっていた。

しかし、今月は違った。

「隊長」

柘は命人のことを「隊長」と呼ぶ。命人は名前がいい、というが柘は公私を混ぜる訳にはいかないと思っているので、一年間「隊長」と呼んでいる。

「ん、なんだい、木野君」

一方の命人は名前に「君」とつけて呼ぶ。以前、「君付けで呼ばず、地位である少尉と呼んでください」といったら、「地位で呼ぶのはお偉いさんだけにしている」と一蹴されたことがある。柘それ以上強く言うことも出来ず、結局うやむやのまま、一年近く過ぎてしまった。

「いつになったら、出勤要請は来るんですか」

「さあね」

「どんなときに来るんですか」

「教えられないね」

この会話はこの一年間何百回と繰り返されてきた。つまりこの一年間、この隊は一度も出勤していないということだ。

沈黙。

いつもはこの空気では話は終わる。だが、今日は珍しく命人が会話を始める。

「どうしたんだい。いつもの君らしくないね」

「自分は……。早く自分の力を現場で示したいんです……」

いつまでも力の火を燦らせると、火が消えてしまう。

柘は柿本が昇進したことに嫉妬を覚えていた。もしかしたら、追い抜かれてしまい生涯一少尉かもしれぬ。正直、そんなのはいやだ。

「昇進したいんだね」

そんな柘の心を見透かすように命人はいった。

「けど、最初の日にいったと思うけど、この隊は……」

それ以上続けることは出来なかった。

何故なら、この一年間、決して鳴らなかつた電話が鳴り響いたからだ。

命人は素早く受話器をとる。
その様子を見ていた柗の心は興奮していた。ようやく、自分の力を示せるのだ。

「……はい……分かりました」

ガツチャ

この受話器が置かれる音をどれほど待ちわびたことか。
「事件ですか！」

興奮した様子で柗はいった。

「そうだよ」

「出勤要請ですか」

「…そう」

そういつて命人は「病院に行こう」と続けた。

「被害者に聞き込みですか？」

水を得た魚のような要領で柗は言ったが、「違う」と短く否定された。

「……被害者に会いに行くことは合っているけど聞き込みはしない」
柗は納得いかない。被害者に会いに行くのに聞き込みをしないと
はどういうことだ。

教科書でしか学んでいない柗にはわからなかった。

「会いに行く被害者の名前は、木野椿^{もくのつばき}。君の妹さんだよ」
柗の頭は真っ白になった。頭だけでなく顔の色も。

このとき。平和は消え去っていた。

それは彼が望んだこと。

彼女が望まなかったこと。

クロス×ライン

クロス×ライン

間話 考察と記憶(前書き)

長い間放置してすみません。

自由というのは不自由なこと。

どこかの本で読んだことのある一文だ。

全くそのとおりだとボクは思う。自由であって得したことはあまりない。

ああ、そうか。得がないことを自由というのかもしれない。

まったく、困った言葉だ、自由というのは。

人は自由であることを求める。

だが、得がないことを求めようとするとするなんて滑稽な話だ。

例え、自由が手に入っても隣に誰もいなければ死人と大して変わらないというのに。

だが、

だが、この一年で本当の意味で幸せだった。彼と一緒に過ごさせて…。

平和だった。ボクに自由はなかったけど平和だった。

……そうか。

人が自由を求めるのは平和を欲しいからか。

平和と自由は同じじゃないけど。

求めるものは同じ。

平和。

クロス×ライン

ボクが造られた意味。

ボクが最も好きな言葉。

ボクが存在してはいけない言葉。

周りを見た。

動いている人が見当たらない。瓦礫だらけでまともに建っている建物はひとつもない。

二度と見たくない死の景色。

耳を澄ませた。

瓦礫だらけのその下から、これから最期を迎える人間たちの最期の声が聞こえる。

二度と聞きたくない死の声。

臭いを嗅いだ。

周りに漂うのは鉄の匂いと何かが焼ける臭い。

二度と嗅ぎたくない死の臭い。

空を見上げた。

空は血のような赤と闇の黒い雲のコントラストで地上の残酷な光景をさらに際立たせている。

二度と見たくない死の空。

河を見た。

河にはたくさんの何も言わずに浮かぶ人の群れが浮かんでいる。他の生き物と一緒に。

二度と見たくない死の河。

けれど、

けれど、どんな死体よりも、どんな景色よりも、どんな臭いよりも、どんな色よりも。

一番、

一番、見たくないのは自分の姿。

死の川の水面に浮かぶ今の自分の姿。

死の空の下にいる自分の姿。

クロス×ライン

死の臭いの中にいる自分の姿。

死の声の中にいる自分の姿。

死の街の中にいる自分の姿。

生きている自分。

死んでいく周りのみんな。

自分とみんなの違い。

そんなのなかったのに。

昨日まで無かったのに。

明日から違いはある。

決定的な違い。

生きているか死んでいるか。

たったそれだけ。

それだけ。

クロス×ライン

違いはそれだけ。

間話 考察と記憶（後書き）

これからも亀更新ですが読んで頂けると嬉しいです。

クロス×ライン

四話 黄昏の蛇（前書き）

完全新作です。

クロス×ライン

四話 黄昏の蛇

西暦二千二十五年、一月三十日午後四時

帝都のとある商店街

帝都上級学校生の木野椿もくのつばきの嫌いなものはピーマン、青魚。その次に自分の兄、木野柊であった。

兄のいいところをあげよ、と誰かに聞かれれば真っ先に「ナシ」と答えるだろう。

いつも、物足りなさそうな顔をしているくせにいざ、何か起こると慌ててしまう。こんな優柔不断な男のどこに「いいところ」があるんだろうか。

去年の春くらいに振られたらしいが、振った方。あなたは正しいです。こんな男に一生ついていくよりは新しい世界へ飛び出したあなたには、きつとバラの咲き誇る人生が送れるでしょう。あなたに送られるはずだったネックレスは私が丁寧に扱っていただいております。

閑話休題。

この時間帯は放課後である。椿はどここのクラブにも入部していないので学校が終わればまっすぐ家に帰る。

今、椿が今歩いている場所はこの街の辺りでは賑やかなほうにあたる商店街であった。

商店街といっても建っている店はCDショップに服屋、小物店、さらにコンビニなどバリエーションは豊富だ。以前は、八百屋や肉屋など前世紀的な店が多かったことも大分、近代的になった。

もし、今日が休日であるならば私服を来ていてこの後、友人（多数）と一緒にレストランかカラオケに行く時間帯なのだが……、残念ながら今日は平日で制服を着ている。さらに言うなら今隣にいるのは友人（多数）ではなく友人（一人）で男だ。まあ、男といっても彼氏ではなくクラスメイトの友人である、影村藍だ。かげむらあい

女の子のような名前であるが先述したとおり、正真正銘性別は男性である。が、女の子のような顔をした男だ。

背は私より低いし、顔は女の私も羨む子顔だ。顔つきも中性的で着ている服が男子用のブレザーではなく女子用であったら間違いないところかの事務所に『女の子』としてスカウトされる。

ここまで言えば彼氏として全く問題ないように思える。外見だけは。そう、外見だけなら私の好みだった。

「木野さん、どうしたんですか怖い顔して」

「……ちよつとね。考え事」

（人の気も知らずに……。）

今こうして一緒に歩いているだけでも嬉しいのだ。さらに、それを自覚している。だから、

「あんだ、どこに行きたいの」

「えっ、決めてませんけど」

そして、先にも言ったとおり私は優柔不断な兄のような男が大嫌いなのだ。

こいつも優柔不断な面さえなければ、ホントに……。

「あんだねえ！」

「す、すみません。えっと、CDショップに行きますか？」

「日本語が変！それに、CDショップはさっき通り過ぎました！」

まったく！こいつはなんて奴だ。目的地も決めずに歩いてきたのか。だが、「もう帰る！」と怒って帰るのももつたいない。友人達の協力で現在のこの「二人つきり」の半デート状態までもっていくことが出来たのだ。

ここで癪癪を起こして別れてしまったらそれこそ友人達に申し訳が

立たない。いや、それ以上にこれからの藍との接点がなくなってしまう。

それは椿にとってもっとも、恐れていることだ。

学校では常に積極的にリーダーシップを発揮して周りを引いていくタイプの人間である木野椿と、正反対に学校でも静かであり周囲と交わりを持たない影村藍はまさに『太陽と月』の関係であった。

『月は太陽がないと輝けない。

しかし、太陽は輝かそうと思つて輝いているのではない。

たまたま、そこにあるから月は輝く。』

幼い頃のどこかで聞いた言葉だ。

しかし、自分と藍の関係は『太陽と月』は少し違う。太陽である自分から見て、藍はとても輝いて見えたのだ。

「あの、どこに行くんですか、木野さん」

遠慮しがちな藍の声が聞こえて我に返った。

「えっ、な、なに」

「いや、そっちは」

「え、一体何が……」

藍の目線の先にある『モノ』に視線を合わせた。

その先には明らかに学生服の自分たちが近寄ってはいけない区域

……、簡単に言えばラブホテルの密集地域であった。

「っ、ば、バカ、早く言いあさいよ」

少し噛んでしまった。地味にとっても恥ずかしい。

「だ、だいたいあんたは少し優柔不断なのよ」

行った後でもものすごく後悔した。本音ではあつたけど。

ホントはこんなことを言いたいんじゃないのに……。

「それにねえ、あんたは……」

滑り落ち始めたトロッコが急には止まれないように、椿の言葉も急には止めることは出来ない。進み始めた時計や運命と同じ様に。

この時も例外ではなく、椿の口はさらに本人の望まぬ言葉を連発しようとした。

だが、それ以上言葉が出ることはなかった。

藍が自分を見ているのではなく、自分の後ろに目をやっていたからだ。その目は椿が今まで見たことのない目だった。鋭い刃のように鋭かった。

その雰囲気を押されて暴言も止まった。

「……どうしたの、一体？」

不安になり、後ろを恐る恐る振り向いた。

普通の男がいた。これといった特徴もない普通の男。普段着を着た普通の男。だが、その男は異質であった。何が異質かというところ、纏っている空気がなにより普通とはかけ離れているように感じられたのだ。さらに、目の色が奇妙なくらいに黄金色にキラキラと輝いていた。

椿と視線が合う。

笑った。椿と視線を合わせた瞬間、視線を感じた瞬間に男は笑った。椿達のほうに向かって笑った。

もみ上げ近くまで、口の端が上がり笑った。人間の顔つきではなく蛇のようだった。

ゴギャリッ

そんな奇妙な音が男から鳴り、次の瞬間、男の身体が内側から膨張、破裂した。血は出ず、ただ身体の腕や脚の部分が胴体に吸い込まれていくように縮んでいく。それと反比例するかのようには身体は

巨大化していき、肌の色も肌色から黒ずんでいき、口の両端の歯が伸びていく。そして、

そして、目の前には人間の男ではなく、ビルの高さよりも巨大な黒い大蛇がそこに現れた。先ほどまで人だったとは到底思えない姿。唯一変わらなかつた、ギラギラとした黄金の瞳が黒色との対比でやけに目立っている。サーベルのような銀色に光る牙が口内に収まりきらずに口の両端から伸びていた。

「ひっ」

情けない声が出た。その声が自分の声だとわかつたのは誰かに腕を引かれる感覚があつたからだ。

周りの人たちも人が大蛇に変わる瞬間を見たのか、それとも大序の姿を見てなのかはわからない。椿が覚えていることは最初に悲鳴が起こり、その悲鳴が放射線状に広まっていったということだけだ。

人々の悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴……。

「走って！」

悲鳴の中での藍の声がやけに響いて聞こえたような感じがした。

自分の腕を引きながら走ろうとする藍の姿。

だが、椿は動かなかつた。動けなかつた。恐怖で身体が動かない。物語でよくある表現だが、実際本当だつた。恐怖に縛られ動けない。動かせない。

「動いて、椿さん！」

その声に我に返つた椿は恐怖を無理やり押さえ込み走ろうとした。だが、動けない足を無理やり動かそうとしたからか数歩進んで派手に転んだ。当然、腕を引いていた藍もバランスを崩し転ぶ。

転んだのは久しぶりだつた。小学生のとき、転んで怪我をした。

手のひらと足から血が出て痛くて、とても痛くて。

「立って、立つんだ木野さん！」

藍が乱暴の口調で話すのは始めて聞いた。ああ、きっと、これは夢なんだ、夢。どうせならもつと楽しい夢がいいのに。楽しい夢が見れるように目を閉じよう……。

椿の頭は現実逃避に走っていた。

椿は倒れこんだまま、溶接された鉛のようにその場から動かなかつた。口の中でなにやらブツブツ何かを呟いている。

「動いて、立つんだ、動いて立って、木野さん！」

自然と二人の周りの人影はなくなる。皆、我先にと一歩でも遠くに逃げたのだ。逃げ遅れてしまった椿と藍は大蛇にとって絶好の獲物だったのだろう。

藍は大蛇を睨みつける。

大蛇の黄金色の瞳に睨みつける藍の姿が映る。

両者の視線の一瞬の交わり。

大蛇が鎌首を上げて二人の人間を、その鈍い銀色に光る牙で串刺しにしようとする。

藍は椿の身体に抱きついた。椿の身体を少しでも守るように。たとえ、それが何の意味も成さないことだったとしても。

藍は眼を瞑った。

ダンッ

人影ひとつない、ゴーストタウンの中でその音はやけによく響いた。

すると、音が響き終わらないうちに耳を塞ぎたくなるような叫び声が聞こえ出した。大蛇の頭部に丸い穴が開き、そこからヌメヌメした赤い液体　血液が溢れ出ていた。その血が黒い道路に赤黒い血の池を形成していく

藍は音が聞こえた方向を見た。

その方向にはビルの上に立つ人影がひとつあった。逆光でよく見えないが腕から出ているものを構えている。銃のような筒を。

叫び声の音量が下がった。大蛇は人影を見つけると、黄金の瞳に明らかなき意を向けていた。頭部からの血はまだ止まっていないが、痛みよりも人影に対する殺意が上回っているらしい。幸いなことに藍と椿の存在は忘れていない様子で、チャンスと思い藍は椿を引きずるようにして蛇から離れていく。

安全と思われる場所に着いたとき、遠くにいる大蛇はその巨体を生かして、人影がいるビルに体当たりした。

当然のようにビルは崩壊し、瓦礫の粉塵が舞う。普段ならばビルが崩壊する場面にそうそう出くわしたりしないが、何故か藍にはこの時、これほどびつたりな場面はないように感じた。

人影も巻き込まれたように見えたが、藍はこの程度でやれるとは思わなかった。

案の定、すでに人影は傷ひとつ負わずに道路に立っており、巨大な蛇に対しての戦闘準備が出来ている様子で動かない。

一人の人間が自分よりはるか巨大な怪物と戦う。

そんな漫画のような出来事が藍の目の前で展開されている。

怪物も人も動かない。藍は先に動いたほうが負けるような気がした。

そして、先に動いたのは……人影だった。

腕から出ている銃口のような筒を蛇に向ける。そのとき、蛇は口から何か液体のようなものを口から吐き出した。地面にその液体が付着すると不吉な煙が上がった。

溶解液だ。

藍は確信した。あんな液体に触れば人の身体は簡単に融けてしまう様な気がして、それを示すかのように人影がいた場所は煙を上

げながらドロドロに融けていた。人が最初から存在しなかったように。

「負けたのか？」

藍はそう思った。

蛇もそう思ったのだろう、動物には絶対に存在しないはずの笑みを浮かべた。

次の瞬間、笑みを浮かべたままの蛇の首がゴトリという音とともに落ち、首の断面から血を噴水のように撒き散らした。巨大な身体いまや死体となった重い身体がゆっくりと地面に倒れた。軽い地震のようにその場所が少し揺れる。

巨大な骸の横から人影が赤い池を踏みしめながら、ゆっくりと歩いてきた。

先ほどまで筒状になっていた手を刃状に変えている。

藍は理解した。

人影が先に仕掛けようとしたのはフェイクで、本当は相手の隙を突くために、懐に入るために先に動いたのだと。そして、隙を見せた相手の懐に飛び込み、腕を刃に変えて首を斬りおとしたのだと。

人影のシルエツトがはつきりしてきた。

人影は大人の男のようでオールバックに髪を固めてサングラスを掛けており、表情はまったく読めない。コートには返り血なのだろう、赤い液体で黒い生地が染められている。だが、何より目に付くのはその腕であった。長袖のコートから長く突き出ているそれは、人の腕ではなく、黒い両刃の剣のような形状に変形していた。黒い刃に付いている血はコートに付いている返り血以上に目立っていた。

「いままでのコトを見て気を失わないとは、たいした根性のガキだ」
人影が言葉を始めて出した。深く唸るような声だった。怪物一匹を倒したのに息切れを起こしている様子はない。この男のほうが化け物ではないかと疑ってしまう。

「その女は大丈夫か」

「えっ。あっ、はい。怪我はかすり傷だけですし大丈夫だと思いま

す

「……そうか」

そういうと刃状の腕が、映像が逆再生するかのように元の形に戻っていく。人の手のひらに戻っても血は付いたままだったが。

男は手のひらに付いている血を、表情が読めないサングラスの奥の瞳で見たまま藍に聞いた。

「お前、名前は？」

「まずそちらが名乗ってください」

藍が男を睨みつけるようにして言うと、初めて表情がわかる声を発した。苦笑しているような声でいった。

「根性あるな、お前」

血糊のついた手の平をコートで適当に吹きながら男は名前を言った。短く、

「今は六甲と呼んでくれ」

五話 移動（前書き）

これからツキイチのペースで更新していこうと思います。

クロス×ライン

五話 移動

西暦二千二十五年一月三十日、午後五時

帝都第六ブロック基地内の零番隊隊室

命人に妹である椿が『有害指定生物』に襲われたと聞いて、命人から椿がどこの病院に搬送されたのかなり強い口調で柊は聞いた。

「一体、どこの病院にいるんですか！」

「落ち着きなよ、木野君」

「これが落ち着いて……」

「はい、スー、ハー」

「……スー、ハー」

「うん、うん、いいよ。落ち着いたかい」

「多少は……」

「落ち着いたところで、場所を言おうか。場所は『帝国立第六病院』だよ。車を回すようにいうから……君、運転できるよね」

「出来ますけど。隊長だって……」

「ボクが運転をしたら優秀な憲兵に引つ張られるじゃないか」

「……それもそうですね」

「あっさり、納得されるのも結構傷つくものだよ」

どこか気の抜けた会話をして、命人は再び受話器を手に取り車の手配を済ませた。

「さ、早く行こう」

この一年で見慣れてしまった青い瞳がせかすように言った。

軍用の車庫に着き、その管理兵から車の鍵を貰った。鍵を受け取った命人はその鍵を柁に渡す。その兵士に案内され、見せられた黒い車体の車は一見すると普通の車と見分けはつかなかったが、ガラスは防弾性という事に柁は気づいた。

「なんで、防弾性なんですか」

「見ただけでわかったのかい。一応、軍の車両だからね。普通のガラスよりは安全でしょ、色々だね」

そういうと命人は助手席の扉を開けて助手席に乗り込む。柁もそれに続いて運転席に乗ったときには命人はすでにシートベルトをつけていた。柁もシートベルトをつけながら命人は言う。

「妹さんは電話によると軽傷、擦り傷だけだつて。今は気を失って寝ているらしいよ。そんな心配そうな顔しなくても大丈夫だつて」
「少なくとも無傷じゃなければ安心できません」

はつきりと柁は言った。柁が借りた車の鍵にエンジンをかけると、小気味いい音と振動が車内を揺らした。

「妹さんが大切なんだね」

命人が前触れもなく聞いた。その質問に柁は迷うことなく答える。
「たった一人の肉親ですから」

「ご両親は……。言いたくなければ言わなくていいよ」
「……両親は自分が子供の頃に事故で死にました」

短く柁は言った。別に悲しむ様子もなく淡々と事実を語る。

「自分が子供の頃、椿を、妹を祖父の家に預けて出かけたときに事故に遭った。そう祖父から聞いています。そのとき自分もまだ子供だったので悲しみはしましたけどもう過ぎたことですよ」

「そう……それは尚更心配だね」

命人がそういうとポケットから携帯ゲーム機を取り出した。

「ここでもやるんですか」

柁は少々呆れてしまった。こんなわずかな時間も惜しむことなく強さを求める自身の上官の姿に。

「時は金なり、だよ」

命人がそう言ったあと車内はゲームの効果音以外は聞こえなくな
った。

車が発進し基地の軍門を通り車道に出る。外はすでに暗くなつて
いた。電灯の明かりで昼とは違う感じの明かりに包まれる街中を車
が走る。

「『生物』が……」

「ん？」

柊がハンドルを握りながら言葉を紡ぎだした。沈黙を破るかのよ
うに。不安を逸らすかのよう。

「『生物』が街中で暴れるって、ここ最近聞いたことありませんで
したよね」

「そうだね。それに街中まで来れるって事は彼、もしくは彼女はか
なり上位クラスの『生物』だよ。」

「『生物』の上位クラス。それは喰った人の皮を『被る』ことがで
きる『生物』のことだ。人の皮を被れば人間社社会の中に溶け込み
簡単に『食料』が手に入る。周りはエサだらけなのだから。だが、
このことが出来る『生物』はある程度の『理性』を持つ、上位クラ
スの『生物』のみだ。それ以下のクラスの『生物』はなりふり構わ
ず、本能に従い死ぬまで人を喰い続ける。

「『理性』があるかないか。

これが上位と下位の違いだった。

「理性ある『生物』がなんで街中に？すぐに殺されることがわかっ
ているはずですよ」

もしかして、死にたかつたのだろうか。

ある種の鼠は大量に増えすぎると集団で海に飛び込むというのを聞
いたことがある。

命人の答えは、

「……………」

彼女もわからないというように。唯一聞こえるのは非現実の世界の効果音だけだった。

対向車線の車のライトが二人の車内を照らした。

柎たちの乗る車の中を照らした車の中では二人の男が話している。

「これで計画は上手くいくはずだ」

「しかし、あのような手段で零番隊を動かすというのは……かなり乱暴だったのでは」

「他にいい方法があるかね。むしろ、あの程度の被害で零番隊の出動要請が来たこと自体、私は驚いているのだよ」

「……確かに私も驚きました」

「まあ、これであの役立たずの処理も滞りなく進めば何も言うことは無いのだが……さすがにそう上手くはいかないだろう。いや、あの役立たずが予想以上の働きをしたとなると、それはそれで我々の計画は破綻だよ」

「そんな可能性があるでしょうか。あいつにはもう……」

「確かに、完全な状態とは言えないが、そのことが逆に予想外の力を引き出すことにも繋がることがあるのだよ、大尉」

彼らの会話は当然柎たちには聞こえなかった。

病院に着くと大勢の人でフロアが埋まっていた。決して狭い訳ではなく人が多すぎるのだ。

「『生物』が街中で暴れるといつもこうだよ」

命人が訳知り顔にいった。

「どういうことですか」

「『生物』の中には病原菌を発生する奴もいるって事だよ。消毒をしに来たんだろうね。健康は大切だから」

命人の言葉の内容で柎の記憶の中にヒットする事柄があった。

「【事例一】『生物』空輸密輸事件】ですね」

「その通り」

【事例一『生物』空輸密輸事件】とは二十年前に起こった事件で、その名の通り初めての空輸密輸事件のことである。この事件は空輸密輸途中、急に暴れだした生物が輸送機から外に出て、通過途中の下の街に着地した衝撃で『生物』が死亡し、その死体から病原菌が発生。街一帯の住人全員がその病原菌によって感染死するという、『生物』密輸史上最悪の被害を出した事件であった。

これ以後、『生物』が死ぬと病原菌が発生するという噂が蔓延し、捕殺を避けるという動物愛護団体以外の一般人の主な理由のひとつだった。

実際には全ての『生物』が死んだときに病原菌が発生するわけではなく、この事件で死亡した『生物』の能力がたまたま病原菌を発生させるというものだったためであり、死亡した直後、この能力が暴走したためである。

「うん、二十年前、その事件のときに行った病院もこんな感じだった」

二十年前といえばまだ、柊が五歳の頃だ。その頃からすでに目の前にいる小柄な少女は軍に身を置いていたのか。

柊は耐え切れず初対面のとくと同じ事を聞いた。

「一体何歳なんですか、森山隊長」

「教えない」

答えは前と同じく短かった。

「それよりも、ここに来た理由、忘れてるわけじゃないよね」

「もちろんです」

妹である椿の安否の確認である。命人は軽傷だといったが、実際に自分の目で妹の怪我の状態を確認しないと柊は安心できなかった。

そして、先ほどの会話で気になることがあった。もし今回死んだ『生物』が二十年前の『生物』と同じ能力だとしたら……。

「今回、死亡した『生物』の能力は？」

「溶解液を吐き出す奴だったらしい。珍しい能力じゃないよ」

危険であることには違いないはずだが。そう柊は思ったが何も言わずもうひとつ木になっていることを聞く。

「死んでも病原菌は」

「発生しなかった。六甲が確認したから。まず、間違いないよ」

そのことを聞いて安心したが気になる名前が出てきた。

「六甲って、確か……」

どこかで聞いたような名前であったが、思い出せず、命人が答える。

「今君の使っている机の持ち主で零番隊の副隊長だよ」

柊はこれまでの会話から、もしかしたらという推論を組み立てた。

「その人が今回の『生物』を倒したんですか」

一人の『人間』で『生物』を倒したとなるとそれはもはや『人間』ではない。『生物』と同じ『化物』である。

「そうだよ。もちろん一人だね。無茶するタイプなんだよ、結構ね」

青い瞳が少し笑った。

柊は「そういう問題じゃない」と思ったがもう何も言わなかった。

こうなったら直接本人に聞いて真偽を確かめよう。

そんな考えを知ってか知らずか、命人は言葉を続けた。

「連絡をくれたのも彼。『生物』が現れたときにたまたま、近くにいたらしくてね。彼がいなかったら被害はもつと出ていたかもしれないよ。会ったらお礼、言わなくちゃね」

五話 移動（後書き）

気長に待っていただけると幸いです

クロス×ライン

六話 一同(前書き)

ツキイチと言っていました。が早く出来たのでアップします。

クロス×ライン

六話 一同

西暦二千二十五年一月三十日、午後六時十五分
帝都第六病院 病室

目を開けるとそこは白い天井だった。消毒液の特有の臭いがしたのでここが病院だとわかった。

(なんで病院にいるんだろ)

ぼんやりとした頭で椿は考える。最後の記憶は藍の叫び声だったような……。

そこまで考えて思い出した。

(そうだ。私、確か化け物に襲われてそこで気を……)

「気がついたか」

聞き慣れない男の声が聞こえた。

声の聞こえた方向に目をやると、そこには髪をオールバックにしてサングラスに無精髭を生やし、黒いロングコートを着た良く言えば渋い、悪く言えば怪しい男が壁にもたれた体勢で立っていた。

「あなた誰？」

「きたがみ すすむ
北上将」

無表情な顔でいう。

「名前を聞いてるんじゃない。何者なのかって聞いているの」

「自分では少なくとも君の『命の恩人』のつもりだけだな」

彼にしては珍しく冗談めかしのいった。もちろん初対面の椿には通じないが。

「命の恩人？」

「そう、命の恩人」

心当たりが全く無いわけではなかった。この怪しい男がああ蛇の

化け物から自分を助けしてくれたのだとすれば一緒だった少年、藍は無事なのだろうか。

「一緒にいたガキが心配か」

「そ、そんなことないっ」

「わかりやすい反応で助かる」

北上は面白がるように言った。顔は相変わらずの無表情だが。

「あのガキは無事だ。少なくとも、現実逃避の果てに気を失ったお前よりは根性があったみたいだが」

北上にしてみればその言葉は冗談の内だった。だが、椿はそうは受け取らず侮辱されたように感じた。

「悪かったわね！根性なしで！」

「人間の女というものは基本的に根性なしだから気にするな」

椿は気づかなかつたが、北上の声には少しの動揺が含まれていた。彼自身も椿がこれほど怒るとは思わなかつたのだ。

「人間の女つて、自分が人間じゃないように言うな！」

「俺は……」

「どうした、椿！」

軍服姿の木野柊が物凄い勢いで病室に入ってきた。スライド式のドアは見事なまでに開くことの出来る限界まで開けられている。

「ひ、柊。どうして」

いきなり兄が部屋にはいつてきたので椿は驚いた。柊の黒い軍服姿は白い病室にいやでも目立った。

「さっきそこで看護師の人に聞いた」

「少しずれた回答をする。」

「……あなたは？」

北上の姿が始めて目に入ったようで尋ねた。ちょうど北上の姿は入り口から死角になっていたので気がつかなかつたのだ。

「北上将」

「名前を聞いてるんじゃない。どういう身分かを聞いているんだ」
先程の妹と同じ内容の会話をしながら、柊は目の前の胡散臭い男

に決して気を許さないように睨んだ。

北上の方はそんな様子の柎の姿を見て軽く肩をすくめた。
そんな状況の中、病室に新たな入室者が現れた。

「六甲、ここにいたんだ」

能気な少女特有の高い声が下方から声が聞こえた。

「久しぶりだな、長門」

北上は先ほどまでのぶつきらぼうな声とは違い、親しげな声で命人の言葉に返答した。

命人のことを何故かはわからないが『長門』と呼んだ。

「その名前で呼ぶのはやめて」

「そういつならお前も『六甲』と呼ぶのはやめてくれ」

「それじゃあ、なんて呼べばいいの」

「今は北上将と名乗っているのでそれで」

「……言いくいからやっぱ『六甲』で」

「なんだそれ」

「言いくいよ、今の名前も。せめて山田太郎とか田中次郎とかさ」

「明らかに偽名じゃないか」

「バレなきゃいいんでしょ」

「バレるぞ、それは」

「そう?」

「ああ」

「……あの」

放っておいたら日が暮れてしまいそうな（実際にはもう日が暮れているが）会話に水を差すことを悪いと思いつつも、柎は勇気を振り絞って声をかけた。

二人の視線が柎に集中する。ついでに樁も柎の方向を見ているため実質三人分の視線が個室の病室のただ一箇所集中する。居心地の悪さを感じつつも柎は言葉を続けた。

「あの、一体彼は何者なんですか」

「北上将さんらしいよ、今は」

「今は、ってどういうことですか」

「だから、最初の言葉と会話を聞いていなかったの。彼が六甲だよ、
やや呆れた感じで命人は柎の顔を見た。

「……本当ですか」

柎は『驚いた顔の成人男性』のお手本のような顔で北上将のほうを見た。

北上の方はそんな二人をイモリとヤモリの違いほどの無表情の変化で笑っていた。

「六甲？彼が六甲なんですか」

「そうだよ、木野君。彼が零番隊副隊長の六甲こと北上将^{きたがみすむ}だよ」

「先ほどの『長門』というのは？」

「コードネーム、ようはあだ名だ」

北上：六甲は先ほどまでと同じ無表情に戻ってあっさりといった。表面上の変化は命人以外は気づかなかつたが。

「なんでそんな必要があるの」

ベッドの上にいる椿が自分の存在を示すかのように質問した。部外者である椿にも命人は別段隠す様子もなく、あっさり質問に答える。

「昔の習慣かな。昔、ボクたちの隊も結構物騒な任務が多かつたらね」

「物騒って……柎。そんな、ところで働いているって……」

柎は「違う、違う」と首を振りながらも、妹に自分のこの意思が伝わることはないということが、これまでの経験からなんとなく理解できた。彼女は兄の言うことだけは決して聞かないのだ。

命人がそんな二人の様子を読み取ったのか、命人が安心させるように言った。

「ここ数年はそんなことは無いけどね。」

「あの、すみません。あなた誰ですか」

初対面の相手にとってかなり失礼な返答だったが、命人のほうは気にすることもなく、

「一応、木野柊君の隊の上司、森山命人だよ」

「軍の上司って、ちっちゃい女の子でもなれるんですか」

「ボクはこう見えても子供の年齢は超えているよ」

「それじゃあ、いくつ……」

「さて、さてっと」

年齢の話しに入りかけたときに命人はそういつて会話を打ち切った。

そして、北上の近くまで行き彼の手を引いた。

「なんだ、長門」

訝しげに北上が言う。顔は相変わらずの無表情だが、眉間の皺の数が若干増えた。

「兄弟水入らずになるのにボクたちはお邪魔でしょ」

「……そうだな」

眉間の数が一瞬にして減った北上がそう言い、病室から出て行くとして、

「あ、あの」「あの」

柊と椿の声が重なった。

「椿。お先に」

柊と椿の声が重なり、兄が妹に先を譲る。

「わかった。えっと、北上さん」

「なんだ」

「影村：藍君はどこにいるんですか」

藍の名前を言うとき、椿の顔は赤くなっていたが誰も気づかなかった。

「隣の病室だ。今日明日は大事をとって入院するそうだ」

「怪我は」

「していない。あくまで大事だそうだ。他には？」

「……ありません」

「次は自分ですね。北上さん」

「また俺か。なんだ」

「ありがとうございます。妹を助けてくれて」

クロス×ライン

「……………礼には及ばん」
長い沈黙の後、短くいい病室から出て行った。

七話 勧誘

子供が一つ死んだ。

私の身体から生まれた子供が死んだ。

殺した奴は許さない。

だけど、子供が一つ死ぬことが、私が自由になる最初の一步。

悲しい。

けど、悲しくない。

代わりにあいつが私の代わりになるから。

嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。嬉しい。……
……悲しい。

どっちなんだろう私の本当の気持ちは。

子供が一つ永遠に会えなくなって悲しいのに

嬉しい。

私ひとりだけが自由になれるから。

悲しい。

私の子供と永遠に別れて。

どっちが私の本当の心？

誰か……教えて。

#

西暦二千二十五年一月三十日、午後六時半

帝都第六病院 ロビー

「で、長門。適当なことをいってあの二人の人間から離れたのはどういうことだ」

「まあね。日本に六甲が居てくれたことが不幸中の幸いだよ」

二人は待合用の椅子に隣同士に座っていた。

目の前の景色には相変わらず人であふれかえっており、六甲は人の熱によって白く曇った黒いレンズ越しの世界を瞳に映していた。

そのサングラスのレンズを拭くために顔から外した。その瞳は命人と同じ青い瞳だった。

「偶然だ。俺はアメリカから逃げてきた獲物を捕まえるためにわざわざ日本に戻ってきてたんだよ」

「獲物って今日倒した奴？」

「違う。詳しくはいえんがあんな奴よりでかい獲物だ」

「それはまたご苦労様。けど、」

「協力する気は無いぞ。あのガキに手伝ってもらえ」

六甲は即答した。そしてサングラスを再び装着する。

「何でだい」

「俺は人間が嫌いだ。お前は人間に甘すぎるんだよ」

「六甲こそもつと人間を好きになつたらどうだい。いい人もいっぱいいるよ」

「悪い奴も、だろ」

この言葉は六甲だけに限らず、今ここにはいない零番隊の隊員全員に一回は発している言葉だった。零番隊のほぼ全員、命人以外は人間という生き物を『有害指定生物』並に毛嫌いしていたのだ。

だから、零番隊は命人以外のメンバーが常にあの部屋にいない。例えば人の姿が見えなくても存在は感じるため、基地内にいること自体、彼らには耐えられない状況だったのだ。

そして、人を嫌いになる理由は命人も理解できることだった。それに、それは彼女にも当てはまっている。

やや諦めが入りつつも命人は北上　　六甲に協力してもらいたかった。

「……笹林中将って知ってる」

「忘れるわけねえだろ、あのクソジジイのことは。それよりもあんなのが中将に出世してたのか。世の中あんな人間が国を動かすようになったら末期だな」

六甲は酷いことを言いながら、笹林中将への評価を吐き捨てた。と同時に眉間の皺の数が増える。

「で、そいつが任務を回してきたのか、零番隊に」

「うん、というか今回のこの知らせも彼から教えられてね。驚いたよ。隊の部屋には今もテレビがないんだよ。今度上層部に頼んでみるよ」

「相変わらずだな…で、どんな内容なんだ」

「マジか、それ」

「マジだよ。本当に困るよね」

アハハと命人は笑った。

「笑い事じゃねえだろ！なんでよりもよってなんであそこからあいつが逃げ出すんだ。最も嚴重に管理されていたはずだろう、あいつは！」

六甲にしては珍しく語気を荒げた。声は低く唸る獣のようだったので決して大きくはなかったが、それでも迫力は人一倍あった。

「あいつ呼ばわりはダメだよ。ボクらの仲間なんだから」

「あんな奴は仲間でも何でもねえだろ。あいつがあんなことしなければ……」

「もう過ぎた話だよ。ボクは中将の命令どおり彼女を捕まえるよ。それが任務だからね」

「それに明らかに畏だ。これはお前を……」

「畏ってわかっていれば対策も出来るでしょ」

あつさりと答える命人に、

「……」

六甲は何も言えなかった。

「それを六甲、君に任せたいんだよ。今どこにいるかわからない皆に、日本に戻ってくるように伝えて欲しいんだ。ボクに何かあったときのためにね。後、言う必要はないけど気づかれずにね」

その意味が、「この任務で自分が死ぬかもしれない」といった二ユアンスが大量に含んでいることはありありと感じた。

「……本気が」

「冗談で言うように思える？この状況で」

長い沈黙。時計の分針が八周回ってから返答した。

「……わかった。協力しよう」

「ありがとう。そうだ一つ聞こうと思っていたんだ」

思い出したように命人が六甲にある一つの疑問を尋ねる。

「なんだ」

「『生物』を倒した後にやってきた軍の人に伝えた言い訳は？」

「『通りすがりの生体兵器です』」

「納得してもらえた？」

「いいや。だから正直に『零番隊副隊長、六甲』と言っておいだ」

「それじゃあ、笹林中将には六甲の存在は知られているから、国外にいるだろう皆には伝えることは難しいね」

「あの時無理にでも通りすがりの『生態兵器A』を貫き通しておくべきだったな」

「いや、それは無理があるよ」

「『核』の反応は？」

「実のところずっと反応が止まないんだよ。一度、っていうかボクはあの子を研究所送りにした張本人だからね。六甲と違ってボクの『核』は彼女を敵と認識しているみたいだ」

自虐気味に命人は続けた。

「皮肉なことにボクの意味とは関係ないみたいだよ。『核』は敵をしっかりと見極めている、正しくね」

一方の六甲は天井を見ていた。サングラスの隙間から見える瞳は閉じていた。

「この反応はボクの『核』のバグかな」

「あり得ないな」

六甲は即答した。そして彼の表情が動いていた。いつもの無表情から冷酷に敵を潰すときの無表情に。

「俺もあいつを潰すのに一役買う」

「汚れる役はボク一人で充分だよ」

あくまで笑みを失わない命人の顔を見ながら六甲は言う。

「長門」

しかし、そんな六甲の声に気づかないかのように命人は言葉を続けた。

「それよりも、彼を呼んでこなきゃね」

「…まさかあの人間か」

信じられないというニュアンスがその言葉の中に多量に含まれていた。むしろそれだけで構成されていると聞いていいぐらいに。「だめ？」

だが、命人の言葉には否定する要素は何一つなく、六甲は内心では毒づきながらも認めるしかなかった。

「いや、むしろ最良だろう。俺らの本能にそれほど有効な手段はない」

「だよな」

命人は笑顔でその返答に答えた。そして、命人は椅子から立ち上がり、出て行きた病室のほうに歩き始めた。

「迎えに行くのか」

「うん、ここで待ってて」

「ああ」

命人の軽い足取りの後姿を見ながら六甲は軽くため息をついた。

北上と命人が出て行った後の病室では沈黙が続いていた。

柊と椿は何かを言いかけようとする度に何をいえばいいのかわからなくなってしまうのだ。

この沈黙を先に破ったのは柊だった。

「あ、あのさ」

「なに？」

「えっと、…影村君とは…一体…」

そんな質問だった。

我ながら何を聞いているのかと柊は自分自身に呆れた。

「学校の友達、別に変な関係じゃないよ」

椿はその質問に対して即答する。

「変な関係とは」

「えっ、そ、そりゃあ変な関係とは変な関係よ」

明らかに動揺した様子だった。柊は図らずとも畳み掛けるよう

に聞いた。

「そんな関係なのか」

「だから違うっていつてるじゃん」

「精神学の本で読んだことがあるぞ。即答するときほど相手の本音に近いってな」

「どこの本よ、それ。この前、古本屋に処分した本？」

「昔図書館で読んだ古い本だ」

「そんな古いカビの生えた本なら間違ってる可能性のほうが高いわね。本に書いてあることを鵜呑みにするからね、あんたは」

「なんだと！」

「そんなんだから彼女に振られるのよこの『教科書人間』！」

「なっ、なんだとお」

同じ言葉を二回も言ったことさえ、柊は気づかなかった。

兄妹の喧嘩というのは大概が兄の負けになることが多い。男の兄弟の場合は殴りあえることも出来るが、性別の壁というものがあるとその壁を崩して殴ることもそうそう出来ないものだ。

もちろん、この二人の兄妹喧嘩も例外ではなかった。

「何がわかるんだよ、俺の何が」

「わかるわけないでしょ。バツカじゃないの」

「ば、バカだと……」

「だってそうじゃない。元カノに振られた時だって散々理屈をこねて納得したんでしょ？頭の中で、仕方なかったんだって」

「……」

「ほら、何も言い返せないじゃん」

「……もう帰る」

「なに、逃げんの？バカ柊」

「仕事があるからな」

そういつて柊は病室を出た。足音が妙に大きかった。

スライド式のドアが勢いよく閉まって再び静寂が訪れた。

柊は再び一人だけになった。

「少しくらい男なんだから言い返したらどうなのよ。バカ糞」
そう呟いた。

病室に向かっていた命人が見たのは暗い空気を背負った自分の部下の姿だった。

「あれ、どうしたの、木野君。ぶん殴りあいの喧嘩して負けたような顔して」

「当たらずも遠からずですよ、隊長」

命人は鎌をかけたのだが……どうやら凶星だったようだ。

「まあ、兄弟げんかは出来るって言うのは良い事だよ」

「どこが良い事なんですか」

負ける方に見ればたまったことではない。

「だって、上にしても下にしても兄弟はいなかったら兄弟喧嘩できないんだよ。腹を割って喧嘩できるっていうのはとても良い事だと私は思うな。特に若い内は」

命人はそういいながら右の手の平を青い瞳で見つめた。その行為がどういふ意味なのかは柎には見当が付かなかったが、命人のその雰囲気に柎は声を出すことに躊躇した。

そして、なんとなく思ったことを口に出した。

「…兄弟がいたんですか」

「うん、弟ね。もう死んじゃったけど」

「どうやら、またもや言葉の地雷だったようだ。」

「……すみません」

「それ以上暗くなる必要ないよ。別にもう気にしてないし」

軽いことのように命人は笑った。芯の抜けた炭酸飲料のような笑いだった。

「それよりも、君にとっては朗報かな」

「なにがですか」

「任務だよ。零番隊、久々の任務」

命人の顔は変わらない笑顔だったが、ますます炭酸が抜けて温くなってしまったかのような感じのある口調だった。

だが、今の柁にとってはそんなことは二の次だった。

「本当ですか」

柁にしてみればこの一年でこの上ない言葉だった。

「それじゃ、あの電話は出勤要請の電話だったんですか」

「ああ、言い忘れてたね。あれは笹林中将からの電話だったんだよ」
笹林中将とは『生物』研究で多大な功績をもつ、将軍一のインテリと言われている人物だ。その人物から直々に出勤要請がくるとはこの隊の存在がますますわからなくなってくるが、柁にとってこの時そんなことはどうでも良かった。ようやく自分の力を思う存分使うことが出来るのだから。

「それじゃ、自分は車を回してきますね」

「ああ、たぶんロビーに六甲が座ってると思うから、ついでに呼んどいて」

「わかりました」

柁は子供のように元気な返事をした。そして子供のように走っていった。

命人はそんな彼の姿を見ながら目を閉じた。これから起こることに対してどうか彼が傷つかずに済みますようにと、信じてもない神様に祈った。

命人の言ったとおり、北上将はサングラスをかけて待合用の椅子に座ったまま寝ていた。

すぐに起きるだろうかと柁は思ったが、とりあえず声を掛けてみることにした。

「北上さん」

「なんだ」

一言掛けただけで北上は目を覚ました。

「寝てたんですか」

実はずっと起きてたんじゃないかと柊は思った。

あくびをした北上は、

「ここ三日ほど、ずっと起きたままだったからな」

と不機嫌そうに言った。

柊は悪いことをしたと感じて、できるだけ爽やかにこれからのことを伝えた。

「任務です。自分が車を回してくるので病院の玄関で待っていてくれますか」

どうでもいいというように首を回しながら、不機嫌な口調そのままに北上は聞いた。

「長門は」

「隊長のことですか。すぐにこっちに向かってくるとは思いますけど、柊も変わらず爽やかに答えた。

首を回し終え北上は相変わらず不機嫌そうに言う。

「長門と一緒に玄関で待つからお前は先に車を回して来い」

「わかりました」

最後まで柊は爽やかな口調で言い、駐車場に通じているエレベーターまで走っていった。

北上はその姿を見ずに天井を見ていた。何も考えずただ、ぼうつと見つめていただけだった。何もない白い天井を。

間話 情報屋

帝都内某所。

建物の中で部屋の主が深々と椅子に体を埋めていた。

この部屋は広く置いてある調度品も一つ何十万するものばかりで、この人物の地位の高さがわかる。

部屋の主は静かに帝都の夜景を見ていた。そして、口元を歪ませる。なにを考えているのかは彼以外に知りようがなかった。

不意に部屋に電話のベルが鳴った。先ほどまでの笑みがすぐに不機嫌な顔になる。騒音を消すかのようにすぐさま受話器をとった。

『笹林中将。大元帥から連絡が』

「なんと？」

『あまり、調子に乗るな』と』

「…わかったこう伝えてくれ。『肝に銘じます』と」

「承知しました」

電話越しからもわかる無感情な声で答えた秘書は、こちらが受話器を置くまでは何も言わずただ電話を切るのを待つ。

受話器を完全に置いた後、笹林中将は、「くそっ」と悪態をついた。

一本の高級な葉巻を取り出しマッチで火をつける。一本の高級な葉巻を潰した後、再び受話器をとりある場所に連絡を入れた。

「…ああ、私だよ」

『なんででしょうか。笹林中将』

相変わらず使えなさそうな声をする男だと笹林は思ったが口にはしなかった。それよりも、本題である情報管理の甘さを警告しなければならぬ。

「君の隊の情報管理はどうなっているのだね」

『それは一体…』

動揺した声が受話器越しに聞こえる。

「今、大元帥から連絡が入っていたことを確認した。どうやら我々の計画について何か知っているらしい」

笹林はひどく押し殺した声で使えない部下に言葉を続ける。

『そ、そんな馬鹿な…』

これまで以上に動揺した様子で相手が声も身体も震えているのがわかった。笹林はそんな哀れな部下に情け容赦なく言葉のナイフを刺し続ける。

「それはこっちの台詞だよ。大元帥が掴んでいるのはどちらかの計画かはわからんが…少なくとも計画は延期にしたまえ。君がもう少し有能であればこのようなことにならずに済んだのだよ。この愚か者が」

『し、しかし、すでに零番隊は動き始めました。一体どうすれば…』
本当に使えん奴め。

そう思ったが口には出さなかった。口に出してたととしてもこの事態が好転することはないとわかっていたからだ。

代わりに、

「竹田中佐」

全く使えない部下の名前を言った。

『は、はい笹林中将』

「君も一応、第六ブロックの四番隊長を務めているのだろう。ならば、少しは強引にでも事を運びたまえ」

『しかし、もう準備は…』

「いいかね、中佐。この計画は誰か軍の高官に一人でも知られたら終わりなのだよ。それこそ『ジ・エンド』の標的にされる。私も君もね」

ジ・エンド。

軍専用の暗殺部隊で半ば、都市伝説と化しているが確かに実際に存在していた。笹林も彼らの姿は見た事がないが、見たことがなくても確実に相手、主に軍の高官達の無残な最期の姿はいやでも脳裏

に写る。

自分もそのような愚かな高官の轍は踏みたくはない。

どもりながら愚かな部下の言葉は続く。しかし、

『わ、わかりました。すぐに…えっ』

言葉が途切れた。どうやら小声で誰かと話しているらしい。

「どうしたのかね」

あまり時間を浪費したく笹林は不機嫌な顔になっていた。再び言葉を続けた部下は心なしか少し明るかった。

『……………いえ、大丈夫です、中将。それよりもこの状況を打開する策がありました』

「ほう、どうするつもりかね、大元帥にも睨まれているこの状況で何か打開策でも」

冷静な声で返したが内心では期待を持って聞いた。

『今、私の部下がですね。ある情報屋からその大元帥は来月の一日、つまり明後日に『帝都第六病院』にて手術をするとのことですよ』

「…それは本当かね」

情報屋と聞いた時点で眉唾であったが、大元帥がしばらく政務を休養するということを聞いたことがあった。このことは軍内部でも一握りの高官しか知らず、もちろん一般人に伝わっているわけがない。この情報屋の存在は普段であれば極めて問題であるが、今は状況が状況だったので黙認した。

『ええ、事前入院のため明日のいや、今日にでも病院に入るとか』

一応聞いてみることは聞いてみた。

「…ガセ、という可能性は？」

『限りなくゼロです。試しに我が隊の非公開の弾薬数と薬品種類、量を正確に答えましたので』

「なるほど。それでどうやってその情報屋はその情報を手に入れたのかね」

『非公開だそうです。それに私の裏の世界に詳しい友人にきてみました所、かなり名前の通っている情報屋だそうで、ますますガセネ』

タということは『

お前の裏の友達が能無しでなければな、と思ったがこれもやはり何も言わなかった。だが、これでもしかしたら気づかれることもなく、あの『計画』を完遂できることが出来るかもしれない。大元帥さえいなければ恐れることは何もない。

「そうか、その情報屋はなんといい名前かね。私も確認しよう」

『わかりました。……えっと、『盤上の駒』という名前です』

「わかった。後で私自身が連絡を入れてみよう」

『それでは番号は……』

帝都の夜はさらに闇に覆われていく。

間話 情報屋（後書き）

これからもペースは不規則ですが更新していければと思っています。

クロス×ライン

八話 紳士と赤鬼（前書き）

今回はつまらないかもしれませんが。

クロス×ライン

八話 紳士と赤鬼

西暦二千二十五年一月三十日、午後六時四十分

帝都第六病院 地下駐車場

柊は車を回すために地下の駐車場の中を走っていた。地下なので走る足音がやたらと余計に響く。走っているとき一台の車が地上の方から来る音が聞こえた。柊は安全のため走るのをやめ歩くことにした。

高級そうな黒色をした車だった。ガラスは運転席以外は黒く染められており誰が乗っているかわからなかったが、おそらく政府が軍の高官が乗っているのだろう。今の柊は軍服を着ているのでここで黙って去るといふのはなんだか後味が悪かったので、車に誰が乗っているにせよ顔を見て、敬礼なり何なりしようと思った。

降りてきたのはスーツを着た六十代前ほどの紳士だった。顔は深い顔立ちに白髪交じりの髪で金縁の眼鏡を掛けていた。

その顔は軍の最高指揮官である大元帥、山本源太郎であった。

柊は驚いたという感情を飛び越えてほとんど気絶しかけた。

ぎりぎりの所で意識を失わず、落ち着こうとして深呼吸を繰り返す。冷静に考えて、何がこの状況で最善なのかを考えるために。

この時点で柊の頭の中は、任務のために車を回すことなどすっかり忘れていた。

だがこんなときに限ってどんなに頭を冷やしてもいい方法が思い浮かばなかった。このような状況は全く予想もしていなかったし。そこで最善かどうかは疑問ではあったが、その場で敬礼をしてそれから一切動かなかった。

「お前、そこで何している」

案の定、護衛の軍人に怪しまれて声を掛けられた。顔を少し動かしてみると二メートルはありそうな巨人がそこにいた。正直、今まで一番大きな人間と思っていた柿本よりも大きかった。

「自分は見えての通りの軍人で木野柎少尉であります！そこにいらっしやるのは大元帥殿かとお思っています、このような場所から大変失礼ではあると思いますが敬礼をしています次第でございます！」

「…貴様、ここに大元帥殿がいると何故わかった」

柎の長い台詞を華麗に無視して護衛の兵士は厳つい顔そのままで見尋ねた。

「はい！全く予測していませんでした。私がここにいるのは怪我をした妹の見舞いのためであります！」

「貴様どこの隊所属だ？」

「はいっ。帝都第六ブロック基地零番隊所属、木野柎少尉であります」

「零番隊だと？」

あ、知っているかな。やっぱり有名なんだな。

そんな柎の予想は顔面にめり込んだ拳と共に砕かれた。柎の身体は地面に叩きつけられた。

「貴様、ふざけるのもいい加減にしろよ」

冷たい口調とは逆に顔は赤鬼の如く真っ赤である。辛うじてそんなことが理解できた柎であったが、脳はかなり揺れており思考回路も一時ショートしていた。赤鬼の言葉は続く。

「何故ここに大元帥殿がいるとわかった。正直に言えよ。さもなければ」

赤鬼は懐から棍棒ではなく拳銃を取り出した。

脳が揺れている柎もこの状況は本能で理解した。マジでやばいと。

「本当なんですよっ。自分は零番隊っという」

「それ以上ふざけたことを抜かすと殺すぞ！」

その声は地下の駐車場まで響いた。そして、
「どうしたのですか、下田君」

涼やかな中にも威厳を感じさせる年配の声が耳に響いた。

「大元帥」

赤鬼が大元帥に向かってすばやい動作で敬礼を行った。当然拳銃は懐に閉まっていた。

そんな赤鬼こと下田の様子を見て再び、

「一体どうしたのですか、下田君。何か不備でも」

「この男が零番隊所属とふざけたことを言いましたのでこれから拷問にかけてでも、何者かを突き止める所存です」

もしも、大元帥も知らなければ多分命はないだろうな。

まだ振動が続いている頭でぼんやりと柎は思った。

大元帥の答えは、

「零番隊？ああ、あの」

よかった！知っていてくれた当たり前だけど。

命の生存に感謝しつつ、大元帥にも感謝した。

「と、いうと森山命人君が隊長の隊だったね」

「はい、その通りです」

「なるほど、君が……」

「あの、大元帥殿。零番隊というのは本当に」

存在を忘れかけられていた赤鬼が恐る恐る尋ねた。

「ああ、本当に実在する部隊だよ。最も知っている人間も少なければ、やることも特殊な部隊だからね。知らないのも無理はない」

大元帥は下田に向かってこう続けた。

「君の職務態度が優秀ということとは重々承知しているよ、下田君。

だが、彼の言っていたことは全て本当だ。一応彼に謝っておきなさい」

「……わかりました」

下田は不服そうにしながらも大元帥の言葉に従い「申し訳ありませんでした」と比較的大声で謝罪した。柎も一応「こちらこそ」と頭を下げた。大元帥はというとそんな二人の様子を見ながら満足そうに何度も頷く仕種をしていた。

「さて、下田君。蟠りも綺麗になくなったことだしそろそろ行こうか」

大元帥の目線の先には数人の護衛官が直立不動の姿勢を保ったまま待っている姿だった。柘は正直に不気味だなと思った。

「すみません、大元帥殿」

「いいのだよ。若い者は最初の出会いが大切なものだから」

下田の肩を軽くポンポンと叩き、歩き出そうとして「ああ、そうそう」と再び立ち止まった。

「君の名前は？」

「木野柘です」

「木野君か。森山隊長のことをよろしく頼んだよ」

笑顔で大元帥に頼まれた。

「は、はい」

「それじゃあ、また会うことも会うだろう」

「あ、あのっ」

「なんだい、木野君」

「あの、ですね。何故病院に」

「それは…」

下田が口を開こうとして、大元帥が手で静止した。

「検査病院だよ。出来れば黙っておいて欲しいね」

「わかりました。決して口外しません」

「助かるよ。それでは本当にさようなら」

「はっ」

柘はビシッと完璧な敬礼して、偉大な人物の背中を見送った。その背中が完全に見えなくなるまで。

大元帥の姿が見えなくなってから、

「そっぴゃ、俺は何しにここに来たんだっけ」

時計は七時をとくに過ぎていた。

#

『はい、こちら『盤上の駒』です』

「一つ情報を確認したいのだが」

『その前に名前を』

「……佐々木一志だ」

『嘘はいけません、笹林中将殿。我々の世界は『ギブ&テイク』が基本ですから嘘は命取りとなります。私のような優しい情報屋はそうはいませんのでこれからは気をつけてください』

「……わかった。大元帥が来月の始めに入院するというのは本当なのか」

『はい、本当です』

「わかった、それだけでいい。値段はいくらだ」

『一千万です。その前に笹林中将殿』

「なんだ」

『あなたが何故、大元帥の行動を気にするのかその情報が欲しいのですが』

「断る」

『こちららも商売ですから。』あなたが何故、大元帥の行動を気にするのか』。これを聞き出さなければ裏の世界の罰を受けます』

「脅迫かね。軍の高官に喧嘩を売るつもりか」

『……一年前』

「なんだ？」

『やんごとなきお方がお一人、不幸な飛行機の墜落事故でお亡くなりになりました』

「……」

『その方は前日、私の情報をお買いになったのですが……これがまあ、見返りの情報をくれませんでした。だから……』

「貴様だったのか、市山大臣を殺したのは」

『これが『情報屋』なんですよ。ついでにいいですよ……ここで電話を切るのはあなたのためにはなりません』

「わかった、言おう」

『繰り返しますが嘘はいけません。私の情報網は膨大ですから。嘘が真かぐらいは半日もかからずに調べ上げます。何故確認することが出来るのに聞くのかと言いますと、ぶっちゃけた話、面倒なので本人の口から聞いたほうがいいんです。たとえ建前上でも』

「嘘はいわん。が……この情報、誰かに売るつもりは？」

『さらに一千万』

「……信じていいんだな」

『裏の世界の人間はなんだかんだ言って、義理堅いのが多いですから』

「わかった」

「まいどあり」

暗い部屋の中、受話器を置く音がした後、椅子が軋む音が聞こえた。

「まったく、とんでもない計画を作るな、人間ってというのは。私も一応そうだが」

そう呟きながら、明らかに含み笑いが闇の中から響く。

「けど、ここで消えるようじゃあ面白くないな。残念なことに私は傍観者だからな、君の危機を救うことは出来ないんだよ、長門さん」

そう独り言を呟いたあとで受話器が鳴り響いた。

(全く、情報っていうのは人間がいる限りなくならない)

『盤上の駒』という情報屋はそう思い声を出さずに笑い、受話器をとる。

「はい、こちら『盤上の駒』です」

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1999e/>

クロス×ライン

2008年8月29日17時35分発行